

# ディスカッション

**太田 浩**

モデレーター：一橋大学 国際戦略本部 准教授

**米澤 彰純**

パネリスト：東北大学 高等教育開発推進センター 准教授

**加藤 哲郎**

パネリスト：一橋大学 役員補佐・社会学研究科 教授

**服部 誠**

パネリスト：一橋大学 国際戦略本部 総括ディレクター

## ディスカッション

(太田) ここからは、フロアからのご質問やご意見を基にディスカッションを行いたいと思います。モデレーターを務めます太田と申します。よろしくお願いいたします。

まず1つ目です。「世界大学ランキングに関して、特にTHES/QSにランキングについて、日本は世界第2位の経済大国でありながら軽視されている向きがあります。そのランキングの方法論に関して、日本の大学はどのような姿勢を持つべきでしょうか」というご質問です。すでにそれぞれの講演の中で触れられた部分もあったかとは思いますが、改めてパネリストの方々から、付け加えていただくことがあればお願いします。

(米澤) 基本的には今の段階ではかなり欠点が多いということは重々承知すべきだと思います。加藤先生の方からも話がありましたし、太田先生も詳しいんですけども、実際に今年の2月ぐらいまでのデータというのは、本当に大部分の大学が実際にはどこからデータが引かれたのか分かっていなくて、国の平均のデータとかウェブのデータを適当に使ってやったということが、はっきりしてきています。

ただ、今の加藤先生のお話にありましたように、急速にこの世界大学ランキングが一人歩きをし始めたことに皆が気が付いてきています。それと同時に大学の方もどんどんアプローチしているという中で、結果的にはさらに精緻になっていく可能性はあると思います。

おそらく我々がクレームを付けるぐらいに、他の国の大学もクレームを付けますし、すべての大学が同じように動いていくので、普通に考えれば非常に熱心に取り組んで損はないと言わざるを得ないのかなと思います。

(加藤) 世界レベルの大学ランキングというのは、すべて21世紀になって始まったんです。アメリカの

国内にはありましたけれども、上海交通大学から始まって、THESだってまだ3年、今年4年目なわけです。その意味ではまだまだこれから変わるとは思いますし、私個人は、遠からずGoogleによって全体が画一化され席卷されるのではないかと予想しています。将来、Google・ワールド・ユニヴァーシティ・ランキングができたときの対策を、むしろ考えないといけないと思っています。

国内についてもそうです。例えば朝日の『大学ランキング』というのは、今、78項目の指標を取っているのですが、1994年に始まったときは40項目ぐらいだったんです。朝日は一つの見識として、総合ランキングを出さないとしているので、いろんな大学にそれぞれいいところがあるよという話になっている。しかし世界市場の趨勢は、容赦のない形になって、項目にウェイトをかけてポイント化し総合ランキング化する形になるわけです。

このウェイトのかけ方が、一橋のような社会科学中心の大学にとって不公平にならないようなランキングができてくるか、あるいは自然科学は無視して社会科学だけのランキングの作り方を我々が独自に考えていくか、そのどちらかではないかと考えています。

(服部) 例えばTHES/QSのランキングについては、レーティングのためのデータを集めているQSという団体があります。これはもともとは学生のリクルーティングを専門にしている団体で、特にMBAの学生を世界中に高く売るようなことをビジネスにしているところなんです。これはいわば学生の入学斡旋でして、学生1人斡旋すれば、年間の授業料の10%をコミッションとして大学から受け取るなどの方法で、事業を拡大していったところなんです。そういう中から、大学や学生に関する情報を世界中から集めていく仕組みになっています。しかし、ランキング自体については、どなたかの質問にもありましたけど、今までは情報の分析と言っても、各大学から自己申告であがってきたデータを整理しているという形でしかありませんでした。うちの大学は外国人教員が何人います、留学生が何人いますとか、いうように数字を提供していたんです。中には、早稲田大学のように外国人教員の数の中に短期の非常勤の数まで含めて

申告しているところがあるかと思えば、正規採用の専門科目を教えている外国人教員のみカウントして申告している大学もあるという具合で、かなりのばらつきが出てしまいます。

ただ、私が考えているのはランキング自体は「ゲーム」という要素があることは否めないのですけれども、分析やレーティングのために集めているデータの中には、大学の教育研究活動の向上や改善のために役立つポイントがいくつもありますので、逆にそれを大学が活用・利用することによって、サバイバル作戦の一部として活かしていくことができるというふうに思うわけです。そういう活用の仕方をした方がランキングの順位に一喜一憂するよりも、いくばくか健全であると思うわけです。そんな気がしてなりません。

(太田) 最後に私の方から、今回のTHES/QSからの調査票に関して、本学のデータをまとめて、回答するという作業にかかわった立場から、さらにその過程で、他大学の関係者と情報交換した経験から言いますと、やはりこのような世界的な大学ランキングで求められているデータに関する整備が国立大学はまだ対応できていないと感じました。先方から調査票が送付されてきたときに、それに合わせてすぐデータを準備できない実態があると思います。学内におけるデータの種類や収集の仕方、そして、それらデータの管理が、やはり旧来の国立大学のときに行っていた文科省標準のままなのではないかと感じました。

THES/QSのような世界大学ランキングが求めているデータと本学が従来から収集しているデータにギャップがあるため、先方が求めているような形でデータがすぐ出せない。よって、生データにもう1度戻って、数え直さなければならぬとか、そもそもデータとして集約していないので、そのままでは不明としか書けないような項目がかなりありました。先ほど、服部総括ディレクターからも話があったように、今回のTHES/QSからの調査票に対しても、実はデータを100%完璧な状態にして、提出するところまではいけなかったのです。やはり、データの把握ができていないため、どうしても回答できない項目がありました。また、求められているデー

タに近いようなものがあったとしても、先方の求めている基準で集計し直すという作業が必要なこともあり、対応には苦勞しました。THES/QSのデータ項目は、これから増えていくと思いますので、本学を含め各大学ともその対応には、データの整備と一元化が重要だと思います。

実は加藤先生と私で去年、THES/QSの方が日本に来られたときに会合を持ちました。そのときに非英語圏にある大学として、実はこういうデータも収集してほしいということを要望しました。例えば、英語圏の国々から見れば、やはり先ほど話があったように自国学生の海外留学はそれほど重要ではなく、海外留学生数はTHES/QSの評価指標には入っていませんでした。しかしながら非英語圏では、外国人留学生の受入れと同様に海外留学を重視していますから、そういうデータをぜひ取ってほしいという話をしましたら、今回の調査項目に入っていました。よって、日本の大学で一般的に収集しているデータで世界大学ランキングの項目にないものについては、こちらから取り上げてもらうように要望することも大事だと思います。

いずれにしても、大学の現場ではデータ項目の見直し、きちんとしたデータの管理、そして一元化をして、外部からの多様な求めに応じて、すぐに加工して、提出できるような体制を取っておく必要があるということを、私自身は今回の経験で強く感じました。

(服部) その典型的なものが、実は留学生の数のカウントの仕方なんです。日本の場合は留学生の数をカウントするときに、留学生入試を経たか、一般入試を経たかという形でカウントしています。留学生入試を軸にして留学生を取り扱っているわけです。ところが海外では外国籍であれば留学生でありますので、例えば日本にいる定住、永住の方たちも、これは外国籍の学生として数えられるということになります。いわばものの見方が非常に違うわけです。統計といっても、そういう視点から物事を見ていくということが、非常に重要ではないかという気がします。

(太田) 次の質問に移ります。「ランキングに対し

てはレーティング（格付け）という考え方や方法もあると思います。高等教育の内容に対する評価には、レーティングが優れていると思うのですが、国際的な教育のレーティングという仕組みはあるのでしょうか。あるいは、そうした流れがありますでしょうか」という質問です。これは、まず米澤先生にお聞きした方がよろしいでしょうか。

（米澤）一般的には国を越えてはないと思います。大学評価機関がレーティングまでするのはいくつかの国では例があるんですけども、インドネシアとかありますが、あまり説得的ではないと思います。それから国を越えては教育の仕組みは全然違わせて、例えば、イギリスのオックスフォードやケンブリッジと、アメリカのハーバードを比べること自体、意味がないと思うのです。つまり、チューターのシステムというものをいれてやってるイギリスの仕組みと、コースワークでやっているアメリカの仕組みではまったく違うので、そんなに簡単に比較できません。なお、ドイツ語圏の大学については、CHEというランキングが、レーティングと言ってもよい形のランキングを作っています。

むしろここで取り上げるべきこととしては、ピアレビューが、すごく大事なランキングの要素になっていることだと思うのです。このピアレビューというのはTHESのランキングでは、非常に大きなウェイトが与えられていますが、実はこれがランキングの安定化に寄与しています。つまり、国際大学ランキングは、それぐらい主観が意味をもつ世界ということを考えていただきたいと思うんです。

長期的視点が重要だとわざわざ言ったのは、短期的に上げられるところは私はぜひ上げた方がいいと思うんですけども、その上で長期的な戦略を考えて信用を高めていくということをやらないと、絶対によくなるというふうには私は思っております。

（加藤）レーティングにも関係しますが、知名度を上げるということが、一橋の場合には決定的だと思います。さっきは英語の読み方という話をしました。実は私が言いたかったのでなくて、QSのアジア地域担当の方が、一橋というのは発音しにくいんですと、向こうから言ってきたんです。お茶の水

女子大学も似ています。東京の中のごく小さな地名が付いていますが、銀座や新宿ならともかく、世界的にはまったく無名です。それで世界で300位台ならば、お茶の水女子大学にしてみれば、これはもうブランド力が上がったという感覚になる。それは正常な感覚です。

それがなぜか一橋ではそういう感覚にならない。それは今までのドメスティックな一流感覚があるからで、世界水準ではそれとあまりに大きくずれているので、何か落ちたという感覚になっている、そういうことだと思うんです。これは知名度と関係しています。

あと今のランキングとの関係にもなるんですが、例えば朝日のランキングで細かいところで言いますと、例えば図書館は総合で7位です。ただし、図書館蔵書数は14位で、学生の貸し出し冊数は30位です。もちろん学生数が少ないからですが、そういうものを見ることによって、さっきの服部さんの図と同じで、絶対的な順位よりは、この分野ではこうだけれどもどうもこの分野では遅れているというのを自分たちで自覚する際に、改善のための材料になるわけです。

そういう風に、こちらで使い方を考えれば、いろいろな活用の仕方ができると考えればいいのではないかと考えています。

（太田）次の質問に移ります。「こういう世界的なランキングの決め方とか、どういう資料に基づいて評価しているか、どういう統計資料をどういう構成員がどういう角度から順位付けしているか、もっと詳しく分析しないと、はい、そうですかとはランキングそのものに納得し難い」という意見が出ています。

実は、加藤先生と一緒にTHES/QSの人にお会いしたときに、「データをきちんと提供しない大学に対しては、どのような対応を取られていますか」と尋ねましたら、「こちらで調べて分かる範囲でデータを入力します」というように回答されました。やはり、大学からデータをきちんと提供するということが、評価をされる側は評価をする側と十分なコミュニケーションを取るということは、非常に大事だと思います。評価指標については、お渡しした『カレッジ・



マネジメント』から抜粋した資料の50ページで、主な世界的な大学ランキングと、それらがどのような指標を使っているかというのが、わかるようになっています。これを参考までにご参照ください。

(加藤) こうしたランキングの作り方は今や学問的テーマです。ランキングやその指標をどう取るのかということで、アメリカでは博士論文も出ています。つまり最新の研究分野です。そういうものはウィキペディアの「College and university rankings」の欄にいきますと、だいたい出ていますので、ぜひ、そういうものを見ていただきたいと思います。

一橋に即しては、今日お配りした研究ワーキングの文書がありますので、そこで指標の問題を扱っておりますので、参考にしていただければと思います。

(太田) 世界的な大学ランキングにおいて、どういうデータを取り、どういうところを重点して評価しているかということ言えば、やはり研究に関する評価を重視していて、教育については、教育の成果を評価するということが難しいために、あまり重視されていないと言えます。よって、アメリカのリベラル・アーツ・カレッジ系の大学など、教育に力を入れている大学にとっては、この種の世界大学ランキングは不利であろうと感じております。そのあたりはいかがでしょうか。

(米澤) 国際ランキングというのは本当にアバウトなものだと思います。ランキングというものを考えていく上では、それぞれの国で独自に出されているランキングまで見た方が面白いと思います。

例えばアメリカも相当工夫してまして、これは有名な話ですけど、USニュース・アンド・ワールド・レポートなどというのは毎年とは言わないですけど、かなりの割合で指標を入れ替えたり、ウェイトを変えたりするんです。それは結果的に1位と2位がわりと頻繁に入れ替わるということにもつながってきていて、安定性がないのではないかと批判もされているんですけど、常にベストなものを目指しているんだという解釈もできます。

もう一方にはよくいわれている通りですけど、実際には大学の間で学生を回している傾向があるんで

す。アイビーリーグの間で例えばある大学の学部を出たら、別の大学の大学院に行きなさいということをもしろ奨励する。教員を採る場合にも、他の大学で修業してきたやつを採ってくるというようなやり方をしていて、MITとかは例外なんですけども、そういうような文化というか、国の文脈というのは実は相当にあって、その中でそれぞれの国の大学のランキングが決まってくるものなんです。

ランキングを行っているもののひとつに、「センター」というものがあるんですけど、これはフロリダ大学がやっているものなんですけども、これは大学間に順位をつけない。1位から5位とか、1位から10位は意味があるけども、その間に順位をつけることは意味がないというふうに割り切っております。かなりいろいろなパターンがあります。

そういう国内ランキングの蓄積の上に国際ランキングというものがあって、これはまったくまだそういう意味では発展途上だというふうに言っていると思います。

(太田) 次の質問に移ります。「評価のポイントの事例とそこにおいて高評価を得るために大学の特色が少なくなることはないか。評価ポイントの国際的なスタンダード化は各国間での文化、文明の衝突をもたらすのではないか。日本の大学において特色ある事柄も評価ポイントになるのか」という質問です。要するに大学の国際的なスタンダードが形成されることによって、各国の大学の特色が薄まり、みな同じような大学になってしまうのではないかとというような危惧に対する質問かと思いますが、いかがでしょうか。

(加藤) もうすでになっています、と言った方がいいと思います。特にTHESで評価される大学は、全部1つの方向に向かっていると考えた方がいいだろうと思います。競争から下りるという道、exitの道があると私が強調するのは、そういうことです。例えばICUは、この間THESの日本での会議に来て、どうも自分らはこの世界ではやっていけないと考えられたらしくて、規模からいっても内容でも独自の道を追求する方向を考えていらっしゃるみたいです。その会議で、一橋とICUだけが、もっと社会科学の特殊性を重視すべきだと発言したんです。しかし、

他の50以上の出席大学は、どこも自然科学がありませんから、我々の発言を支援してくれません。そういう世界です。それからドイツやフランスでも、私の経験では、同じような方向に一斉に動いている。少なくとも上の方の、それこそトップ200ぐらいのレベルの大学は、すでにワールドマーケットに組み込まれて走り出していると考えた方がいいのではないかと思います。善し悪しの問題はありますが、ドメスティックなマーケットでオンリーワンで頑張るといふ目標を立てるならば、それはそれでやり方があると思います。

(太田) 他にありませんか。

(米澤) 冷静に考えれば、なっていないと私は思うんですけど(笑)。学部生に対してはまずなっていないですね。ハーバードにして学部は10%ぐらいが留学生、90%がドメスティック。去年ですが、『The Times Higher』でオックスフォード、ケンブリッジが2位か3位ぐらいまで上がったのではないかと思います。じゃあ、それでアメリカ大学ランキング5位のアメリカの大学を捨てて、アメリカ人がイギリスの大学へ行くかというのは絶対あり得ないと思うんです。

留学生の間ではこれはあるかもしれないですが、私はあんまりそこまで一元化の方向へ進んでいるとは思っていません。

(加藤) 実は研究レベルの問題は、アメリカ、ヨーロッパでは大学執行部レベルで競い合っている話です。学生のレベルでの競争は、中国、それからインドというふうに考えていただいた方がいいでしょう。中国のトップレベルの大学からどこにいま留学しているのか、あるいは中国から日本に来る留学生がいまどういう地域のどういう人たちであるのかという問題で考えていただければいいと思います。

(服部) 私はランキングというのは、たぶんこれからますます社会が求めていくものになるだろうというふうな気がしてならないんです。というのは、世界的に見ても、労働力、特に高度な知識やスキルを持った労働力というのは、いろいろな面で社会的な

要請が高まっていくわけで、では、結局、それをどこから取り寄せるか、取り入れるかということになってくると思うんです。そういうときに拠り所あるいは判断のよすがとするものが今まではなかったと思います。これについては、大学がいままで情報提供を怠っていたという面もありますし、大学が社会からアカウンタビリティーを求められるようになったという面もあると思います。世界的な基準で人材やノウハウの活用を考えたときに、そのデータ収集の判断基準のひとつとしてランキングのようなものが大きな意味を持つことになるわけです。また、大学間の交流が進めば進むほど、互いの大学の情報も必要になってきます。そういう流れであれば、大学ランキングといったようなものは、ますます求められていくようになっていく、そういう社会になっていくと思うんです。

加藤先生がおっしゃったように、ランキング自体はウェブ上でもっともっと進んでいくということになるでしょう。そういう意味での競争はすでに完全に始まっているというような気がしてなりません。日本の大学もそのゲームから下りるのか、あるいはそのゲームに乗るのかという意味で、現在は微妙な位置にあると思います。日本の大学全体が、文科省も含めて、悩んでいる段階だというような気がします。

(太田) 私から補足しますと、たぶん世界大学ランキングというのは、最初の方の話でもあったように、純粋に大学を評価しようという側面は、もちろんあると思うのですが、それだけではなく、もうひとつ、これは留学生をリクルートするときのツールだと思っています。今、世界的な大競争の中で大学のランキングや国際的な研究力を上げるためには、質の高い大学院レベルの学生を世界中から確保することが重要となっています。

ちょっと誇張した表現ですが、質の高い大学院生が、無尽蔵にいるといわれているのは、インドと中国で、この2国の学生が留学先にどこを選ぶかを考えるときに、市場型評価である世界大学ランキングを使って決めるようになるという思惑が評価者(ランキング作成者)にあると思います。ですから、それを考えると、THESとQSという2つの企業の組み合わせも頷けます。QSのサイトを見ていただければ

わかりますが、トップMBAやWorldclass graduate schoolと銘打った留学生リクルーティングに関する情報であふれています。

リクルーティングといっても、単にただサイトを作って、そこで大学の情報を提供するだけではなく、大学の教職員とともに世界中で留学生をリクルートするツアーを行っています。世界中をツアーして、大学の留学生リクルート活動を支援する企業が世界大学ランキングを作っているという事実を大学関係者は意識しておいた方がよいと思います。

では、次の質問に移ります。「大学の教員は流動性のあるタレントであるとして、一応建前はそう、実際にどれほど流動性が高いかどうか私は知りませんが、さて、高評価を得るためには、事務局の安定した管理運営機能は十分にあるのだろうかということを感じます」ということですが、どのようにお考えでしょうか。

(加藤) さっきLSEの事例を報告したんですけれども、これは事務局長にも何度かお話ししたのですが、イギリスと日本はシステムが違うので、なかなか博士号を取った人を事務部門で、研究そのものではなくて研究の裏方で頑張ってもらおうというふうな形は取りにくい。給与体系その他を含め制度的に制約されるのは事実です。

ただイギリスのLSE調査で、専門的事務スタッフにもインタビューしたんですけれども、その人は民間企業で高い給料を取っていたけれども、大学という知的職場で、それも研究に関連した仕事をするということに生きがいを感じて、給与は低いけれどもやりたいと言ってきたと。そういう魅力ある職場づくりという意味では、おそらく普遍的な意味を持っていて、そういう人でも働きたいような職場をつくっていくことが基本的な問題だと思えます。

(太田) 他にコメントはありませんか。

(服部) 事務局というか事務体制ということで考えてみると、例えば数値の上で見ても一橋大学の場合は事務職員の方の数が意外と少ないです。他の学校と比べてもかなり少ない。教員や学生数に比べると職員数は非常に少ないと思います。その部分はか

なり問題にはなってくるでしょう。その分、教員の方に事務的な負荷がかかっているという形になっていて、これはそのまま放置しておけば、たぶん雪だるま状に問題が大きくなっていくかなという意味で、かなり危機感を持っています。

個々の方たちの質は非常に高いんですけど、全体のマネジメントとなるとこれはなかなかうまく機能していないなということ、特に強く感じます。私は実は私立大学育ちですので、国立大学に来てからそういう点を痛感しています。私立大学ですと職員の方が教員と対等で議論をするということがありますし、情報の収集なんかでも十分、速いです。慶應とか早稲田などというのは、結構、職員の人達がいち早くTHESランキングを見つけてきて、その対応策などを大学のトップマネジメントに箴言したりしているわけです。早慶の職員の人達の情報収集力はなかなかのものです。

(加藤) 私がやってるような情報収集は全部やってくれている。

(服部) 私もどこかで早稲田の方とガチンコになったことがあるんですけど… (笑)。QSにアプローチしたりしているとそういうことが起きてきます。優れた職員の方たちは大学経営についての見識も高く、積極的に発言をしておられることがあります。一橋の場合、そういうところは今後の大きな課題かなというふうに思っています。

(太田) 私から一言コメントします。アメリカの大学のファクト・シートとか概要のところを見てください。ものすごい職員数です。例えば、大学によっては8,000とか9,000という数が書いてあります。でも実は、これには裏があります。実態として研究型の大規模大学では、相当数の大学院生が学内で、非常勤職員として仕事をしているからです。

GA (グラデュエート・アシスタント)、RA (リサーチ・アシスタント)、TA (ティーチング・アシスタント) などいろいろな言い方をしますが、ティーチングとリサーチだけではなくて、アドミニストレーション (管理運営) においても、実にたくさんの大学院生が働いています。私自身も、アメリカの大



学で、GAとして国際部で働きました。だいたい1週間に20時間ほど働きます。部署によっては、本当の意味での専任職員は管理職の数名だけで、現場の仕事はすべて大学院生のアシスタントが行っているところも珍しくありません。

週20時間を平日の5日間で割ると1日あたり4時間です。1日当たりの専任職員の基本的な労働時間を8時間とすると、それを4時間ずつ午前と午後の部に分けて、2人の大学院生のアシスタントで賄うわけです。ですから、職員の頭数的には大きくなります。しかし、所詮大学院生に対する雇用ですから給与は低い、つまり大学は人件費を節約することができます。大学院生の側も低いといっても、贅沢さえしなければ、生活ができる程度の給与水準です。加えて、授業料が免除されます。よって、アメリカの大学では大学院生が長く時間をかけて博士号を取るケースが、イギリス等他の国々に比べて非常に多いわけです。

そういうシステムが、特に研究型大学で進んでいますので、私はいつもこの話をするのですが、日本の大学でも、そろそろたくさん大学院生がいる大学であれば、大学院生を人材として、大学の管理運営の現場でも積極的に活用するべきだと思います。そうすれば、大学院生も、奨学金が十分でないような状況であっても落ち着いて、長期間勉強ができることとなります。大学の中で働くというのは、大学院生にとっても非常によい経験だと思いますし、運営交付金削減のなかで、財政的にもそういうシステムが必要になってくるのではないかと思います。

最後の質問に移ります。最後は、学生の海外留学のことで、いろいろな方からご質問なり、ご意見をいただいております。まず、「如水会等の援助で学生を海外留学させているが、あくまで個人を支援しているのみで、全学的にあるいは、すべての学生に対してのメリットとはなっていない。むしろそれならば外国人の優秀な大学教員を招いて活躍してもらおう方が、全学的な教育の効果が上がると考えます」というご意見です。さらに「海外留学制度と招聘教授制度とのコスト・ベネフィット分析や双方の長所と短所を研究して実施した方がいいのではないか」というものや、「やはり学生全員が4年間のうちに海外経験をするとというのが、これからはスタンダードに

なってくるのではないだろうか。こういうときに、スチューデント・ローンやスタディ・アブロード・ローン、そういったもので学生を支援していくというシステムをより充実させる必要があるのではないか」という海外留学に関連する事項の質問もあります。どなたかコメントをお願いします。

(服部) それは文部科学省の留学交流の予算を見れば一目瞭然です。予算のほとんどが受け入れに使われていて、それは97~98%にあたります。送り出しの方には2~3%しか使われていないんです。予算だけを見ても、まさに先ほど申し上げた「受信型」になっていて、文科省自身の頭の中が発信型になっていないということがいえるわけです。ようやく2年前から派遣の方にも奨学金が付くようになりましたけれども、これからは派遣のほうの予算も徐々に増えていくのではないかというふうに期待したいところです。

一橋の場合、先ほど、お話しした通り、如水会の奨学金などによる交換留学に関して言えば、個々の派遣学生を見ると本当に質が高いです。私も、現地で2~3人の交換学生と会っていろいろ聞き取りをしてきたんですけど、彼らは本当に優秀です。問題意識も非常に高い。財政的にも非常にたっぷりバックアップされているのでいいんですけども、何しろ派遣する数が少なすぎます。年に30人というのは、物の数に入らないぐらいのレベルのものです。

今、日本の大学でも数百人単位で学生を海外に派遣しています。特に私立大学はそうです。アメリカもこれからどんどん海外に学生を送り出すということをやっていると申しましたが、我々もこれからは、派遣プログラムの開発ということをきちんとやっておくべきだと思います。その取っ掛かりとしてまず短期の語学の研修というのをもっともっと増やして、そこをステップにして次に長期、特に交換留学1年、あるいは2年、さらにダブルやデュアルでディグリー取得を目指すような派遣プログラムという形に持っていかないと、この分野ではかなり遅れを取ってしまうという気がします。

(米澤) 私もほとんど同意します。その上で2点だけちょっと違うことを言おうと思うのは、1つはやはりリスク管理が相当に大きなポイントになってく



るのではないかと思うんです。学生をたくさん受け入れて、学生をたくさん出していけば、普通に考えて何か起きると思うんですけれども、そのときにどう対応するのかというのは、あまり我々、経験したことがまだ十分でない世界で、そのときには下手をすれば本当に評判を落とすことになってもおかしくないことは、いくらでも起きるということを理解して、何をするのかということは考える必要があると思います。

それからこれは最後に近いのでこの話をしますと、私自身はランキングを入り口として世界が日本の大学、一橋大学をどう見ているのか、それに対して真摯に立ち向かうにはどうすればいいのかという話としては、非常にいい話なのかなと思って、今日、このシンポジウムに参加したのです。しかし、一方で魅力ある大学というのは、そういう「私のことを見てね、評価してね」、みたいな大学なのかということを考えていただきたい。やはり友達になれる大学はきっと魅力があるんじゃないかなと私は思います。

(加藤) ちょっと似たような話をしますと、留学生受け入れを増やすという形の国際化は、もし本気でやるとすれば、東大みたいに英語の講義を5倍増やすとか海外拠点とか、そういうことを考えなくちゃいけない。そもそもこの10年の文科省や科学技術会議の文書を見ると分かるんですが、日本の大学は700ぐらいあるんですが、そのうち30ぐらいは世界水準に到達できると文科省は幻想を持っていたようです。それが21世紀COEであり、国際戦略本部でした。

その選択を制度型評価でやろうとしたら、外から市場型評価、世界ランキングが入ってきて、それで見たら実は30大学なんて数はとても世界レベルになれないということが分かってきたのが、去年、今年ぐらいでしょう。そうすると、その波に社会科学しかない一橋が乗って、東大みたいにオックスブリッジやアイビーリーグに立ち向かっていくのがいいのかどうかということも、もう一度立ち止まって考えた方がいい時期にきています。

ランキングの世界で悪いよりはいい方がいいんですけれども、それ以上に、世界的なそういう競争の波の中で、「オンリーワン」を目指すのは僕は可能だと思っているんですけれども、本当に「ナンバーワ

ン」を目指すべきなのか、「アジア・ナンバーワン」を現実的な目標にするのかどうかを、ぜひ学長以下執行部に考えていただきたいと思います。

(太田) 最後に1つだけ配布資料の説明をします。最後にお配りした資料は縦軸に各国の主要大学名が書かれており、横軸には「AEARU」、「AC21」、「APRU」など、たくさん略語のような名前がいっぱい入っていますが、これらは国際的な大学のアライアンスを意味します。

大学間の国際交流というのは、これまでの一対一のパイ・ラテラルな関係から、有力大学を中心にマルチ・ラテラルなアライアンス型に移ってきているということです。たとえるならば、大学も航空業界のスター・アライアンスやワン・ワールドのような連携と同じようになってきているのです。実はこの資料、私がOECDでの研究者の国際的流動性に関する会議に出席する際、日本側で日本学術振興会を中心に作ったものの中の1つです。本来は一橋大学も日本の大学の例のところに入れたかったのですが、本学はまだこの種の国際的なアライアンスに加盟していないので、これに入れられなかったのです。

この種の枠組みによる国際連携の展開が、世界の有力大学の間で今かなり進んで来ており、大学のステータスを示すものになってきています。そして、このようなアライアンスで実効性のあるプログラムを行っている場合もあります。学生や教員の交換プログラムを行ったり、研究者や職員のための国際的なフォーラムを行ったりというものです。名古屋大学が始めたAC21では、加盟大学の学生が一堂に会して、スタディ・キャンプというか、スタディ・ウィークのようなものを行っています。

一方では、ある意味、学長のサロンといいますが、トップ大学の仲良しグループ的な場合になっているものもあります。いずれにしても、これらのアライアンスに後から加盟するというのは、至難の技です。最初に同じようなプロファイルの大学でアライアンスを作って動き出すと、後から入れてくださいと言っても、なかなか入れてくれないケースが多く、この点が航空業界のアライアンスと違うところかもしれません。よって、本学のような後発組は、自らこのようなアライアンスを作るぐらいの気概を持って

取り組まなければなりません。このあたりについて、詳しくお話ししたかったのですが、残念ながら時間がありませんので、これで終わりにします。

(加藤) 大学間学術協定について、一橋大学は伝統的に声をかけられたら二大学間協定や部局間協定ということでやってきたんですが、世界的にいいますと、それが多大学アライアンス型に変わってきています。その主要なアライアンスの動きに、一橋は声をかけられないという由々しい状況です。特に海外に行かれる機会の多い先生方は、大学間協定を結ぶという話よりは、できればいくつか束ねた形のグループ型・ネットワーク型学術交流を考えてもらいたい。それからCOEなどの大型研究も、できるだけ世界的な規模での共同研究という方向で考えていただければと思います。

(太田) それでは、最後に西村副学長に閉会のご挨拶をお願いしたいと思います。

(西村) 時間もたっていますので、ごく簡単に。我々、自分たちの教育研究活動を通じて世界を見るというのは慣れてはいるんですけども、逆に世界の目で大学を見てみると、どういうふうに見えてくるのか。今日、お三方のお話はそういう点で大変ショッキングな話だったと思います。それで先ほどから世界ランキングの競争から、下りるべきか下りるべきでないかというお話がありましたが、私はまだまだこの世界ランキングというのは我々にとって有益だというふうに思っています。

その意味は、例えばLSEのような大学に示されるように、ランキングの改善を目指して我々が努力することで、大学の教育や研究やその他のいろいろな活動をよりよくしていける。まだまだ我々のところはそういう活動の改善の余地が非常にたくさんあるというふうに、私には見えております。ですから、東大みたいに1,500人でしたか、外国人教師を雇うというような、そんなことまで決意してやるかやらないかという、そういう選択は我々はまだ迫られていないという気がします。

これはやはり積極的に取り組むべきで、しかもその基本的なところは、例えば研究の分野でいえば世界に

共通する本当に重要な課題を、センターをつくるなり、グループをつくるなりして、研究プロジェクトを組んで、そこに世界から優秀な先生を呼んで、そして共同で研究し、その成果を世界に情報発信していく、そしてまた、そういう先生たちがピアレビューに参加してもらえるところにあります。基本的な本学の理念とか中期目標、中期計画とか、そういうところに書いてあることの延長上で、つまり本学の基本的な方針に基づいてやっていく中で、このランキングが改善されていくというような、そういう可能性というのはまだまだ残っていると思うわけです。

その他、もう時間がないので省略しますが、情報発信のところにもいろいろとまだまだやらなければいけないことがあるし、それは本学の今後の発展のためにとって、とてもいいことなので、そういう意味で、その下りるかどうかという話は、もうちょっと先の話であろうというふうに私は思っています。

ただこれはそう簡単な問題ではなくて、例えば外国人の教員を1,500人取るという話をしましたが、しかし、考えてみるとすぐに大学院生をどうするんだという話になってしまうんです。大学院生が就職する、そのポストが少なくなってしまうということでもあるわけです。

それからもう一つクラスサイズの問題がありましたけど、ご存じのように定員充足のテンポをスローにするという、そういう計画を持っていて、要するに今の運営費交付金を1%ずつ引き下げていくというような条件の下で、クラスサイズを小さくしていくというのは、これは並大抵な問題ではありません。ですからそういういろいろな制約条件がもちろんあるわけですが、私、最後にもう一度繰り返しになりますけれども、しかし、ランキングをよくしていこうとすることで、我々の大学の従来の基本的な考えの延長上で、大学をもっともっとよくしていく、そういう一つの刺激になる、そういう可能性がまだ残っているということを強調していきたいと思います。

今日は、どうも長いこと、ありがとうございました。充実したひとときだったと思います。どうも、ありがとうございました。(拍手)

## 資料

**Times Higher Education Supplement – QS  
World University Rankings Questionnaire  
THES-QS の世界大学ランキングに関する調査  
で提出を求められた事項**

### Faculty 教員

Where both a headcount and a Full Time Equivalent (FTE) figure are requested, please supply both. The FTE figure will be the one utilized for comparative purposes. If you are unable to provide an FTE figure, a number will be calculated for you based on the average ratio between FTE and Headcount across other institutions in your country or region.

**Number of International Faculty (personnel)** 外国人教員数（助手、助手相当、交換・客員教員等を除く）

Number of faculty who are of foreign nationality. For EU countries, this includes all foreign nationals, even if from another EU state. In Hong Kong, this includes professors from Mainland China. Again, please exclude teaching and research assistants and exchange scholars or visiting professors who are members of another university.

**Number of Faculty (personnel)** 教員・研究員数（助手、助手相当、交換・客員教員等を除く）

Total number of faculty contributing to either teaching, research or both. Please exclude research assistants, PhD students who contribute to teaching, and exchange scholars or visiting professors who are members of another university.

**Number of Inbound Visiting Faculty (personnel)** 海外の機関から客員として本学の教育または研究に携わっている者（過去12ヵ月）

Number of faculty contributing to teaching or research at your university in the last 12 months who are visiting from an overseas institution

**Number of Outbound Visiting Faculty (personnel)** 本学の教員で海外の機関において、客員として教育または研究に携わっている者（過去12ヵ月）

Number of faculty employed by your institution contributing to teaching or research at an overseas institution in the last twelve months

### Undergraduate Information 学部(学士課程)の情報

**Number of Undergraduate Students (personnel)** 学部（学士課程）レベル学生数  
Students pursuing a Bachelor's level or equivalent degree.

**Number of International Undergraduate Students (personnel)** 学部（学士課程）レベルの外国人学生数

Number of undergraduate students who are foreign nationals. For EU countries, this includes all foreign nationals, even nationals of other EU states. In Hong Kong, this includes students from Mainland China.

**Number of Inbound Exchange Undergraduate Students (personnel)** 学部（学士課程）レベルの交換留学生（受入れ）数（過去12ヵ月）

Number of undergraduate students attending your university on international exchange programs in the last 12 months

**Number of Outbound Exchange Undergraduate Students (personnel)** 学部（学士課程）レベルの交換留学生（派遣）数（過去12ヵ月）

Number of undergraduate students registered at your institution who have attended another institution abroad on an exchange program in the last 12 months

**Average International Undergraduate Fees (currency)** 平均年間授業料（学部レベルの外国人留学生）

Average tuition fees per year that an international student would be expected to pay for an undergraduate course

**Average Domestic Undergraduate Fees (currency)** 平均年間授業料（学部レベルの国内学生）

Average tuition fees per year that a domestic student would be expected to pay for an undergraduate course

**Average Undergraduate Class Size (numeric)** 平均クラスサイズ（学部レベル）

The average size of class across all undergraduate programs. The average class size could be understood as the number of all undergraduate students enrolled in classes divided by the number of classes.

**Graduate / Postgraduate Information 大学院課程の情報****Number of Graduate / Postgraduate Students (personnel)** 大学院レベル学生数

Students pursuing a higher-level degree, including both taught and research postgraduates (e.g. PhD students)

**Number of International Graduate Students (personnel)** 大学院レベルの外国人学生数

Number of graduate / postgraduate students who are foreign nationals. For EU countries, this includes all foreign nationals, even nationals of other EU states. In Hong Kong, this includes students from Mainland China.

**Number of Inbound Exchange Postgraduate Students (personnel)** 大学院レベルの交換留学生（受入れ）数（過去12ヵ月）

Number of graduate / postgraduate students attending your university on international exchange programs in the last 12 months

**Number of Outbound Exchange Postgraduate Students (personnel)** 大学院レベルの交換留学生（派遣）数（過去12ヵ月）

Number of postgraduate students registered at your institution who have attended another institution on an exchange program in the last 12 months

**Average International Graduate / Postgraduate Fees (currency)** 平均年間授業料（大学院レベルの外国人留学生）

Average tuition fees per year that an international student would be expected to pay for a graduate / postgraduate course

**Average Domestic Graduate / Postgraduate Fees (currency)** 平均年間授業料（大学院レベルの国内学生）

Average tuition fees per year that a domestic student would be expected to pay for a graduate / postgraduate course



**Average Taught Graduate / Postgraduate Class Size (numeric)** 平均クラスサイズ  
(大学院レベル)

The average size of class across all taught graduate / postgraduate programs. The average class size could be understood as the number of all graduate/postgraduate students enrolled in classes divided by the number of classes.

## Financial 財政

**Annual Library Spending (currency)** 年間図書館経費 (直近年度の図書購入費を指し、運営費を除く)

Library expenditure for the most recent academic year. Please focus on acquisitions and exclude operating costs

**Community / Cultural Investment (currency)** 地域社会貢献・文化保存関係経費 (過去12ヵ月)

Total amount spent on community projects or cultural preservation in the last 12 months Community investment relates to investment in the community local to where the institution is based, this could be anything from urban redevelopment to investing in local primary and secondary education or to members of or groups within the local community through any other conduit (e.g hospitals, prisons, homeless shelters, students involved in community service etc...) Cultural preservation could be perceived as investment in projects that directly contribute to the preservation of otherwise waning aspects of an institution's national culture. Universities in Wales, for example, spend a great deal on protecting the Welsh language and extending its use. There may be other aspects of a national culture which a university may explicitly or implicitly take a responsibility to preserve.

**Total Funding for Research (currency)** 外部資金による研究費総額 (過去12ヵ月)

Please provide a total figure for externally sourced funding allocated specifically for research for the latest completed academic year or for the last 12 months.

**Facilities Investment (currency)** 施設設備等整備費 (過去12ヵ月)

Total amount spent in the last 12 months on infrastructure and facilities investment (e.g. new buildings, communications infrastructure, sports facilities, laboratory equipment etc...) Please count the amount allocated to facilities investment in the current annual budget.

**Government Funding for Research (currency)** 政府からの研究費 (過去12ヵ月)

Please provide a total figure for government funding allocated specifically for research for the latest completed academic year or for the last 12 months - funds from the EU or similar trans-national body can be included.

**Industrial Funding / Investment (currency)** 産業界からの資金・寄附金 (過去12ヵ月)

The total amount of income from industry either for use of facilities, commissioning of research or licensing of intellectual property referring to the latest completed academic year or for the last 12 months.

**Alumni Donations (currency)** 同窓会からの寄附金 (過去12ヵ月)

Please provide a total figure for alumni donations in the last 12 months

## Graduate Output 卒業後の進学・就職

**Proportion of Graduates Pursuing Further Study (percentage)** 大学院進学率

Proportion of undergraduate students pursuing further study at your own institution or any other

**Proportion of Graduates Employed (percentage)** 卒業後 6 月以内の就職率 (進学者は除く)

Proportion of graduates (excluding those opting to pursue further study) in permanent employment within 6 months of graduation

**Number of PhDs Awarded (numeric)** 博士号授与数 (過去 12 ヶ月)

Total number of PhDs awarded in the last 12 months

**Entry Requirements 入学条件****Avg Entry Requirements (numeric)** 平均入学条件 (入学条件としての学業成績平均基準をアメリカの GPA システム (4.0 を最高点) に変換して示せ)

Please express the average academic achievement entry requirements for your institution. Please convert your domestic requirements to the US Grade Point Average system (with a maximum of 4.0) and supply any explanatory notes in the box provided. A value of 0 will imply to us that your institution has an "open access" admissions policy and will in no way count against your institution in any future table built upon this data.

**Research Productivity & Quality 研究の生産性と質**

Whilst the data contributing to the rankings in this area is sourced directly from Thomson. Supplying us with figures here will give us the opportunity to audit the data we are provided with. The metrics we use for number of papers and citations are from Thomson's Essential Science Indicators (ESI) details of which are available here: <http://scientific.thomson.com/products/esi/>

**Number of Papers (numeric)** 論文数 (過去 5 年間に ESI 参照雑誌に掲載された論文数)

Total number of papers published in ESI indexed journals in the past 5 years

**Number of Citations (numeric)** 論文被引用数 (過去 5 年間に ESI 参照雑誌に掲載された論文への引用数)

Total number of citations for papers published in ESI indexed journals in the past 5 years

出典 : QS, QS School Admin, 2007 <[http://schools.qsnetwork.com/index.php?s=guest&m=institution\\_stats&p=print\\_stats](http://schools.qsnetwork.com/index.php?s=guest&m=institution_stats&p=print_stats)>

をもとに和訳を付記し作成。

## ABK 留学生メールニュース 2007年6月号(第67号) 財団法人アジア学生文化協会

## ○大学・大学院改革に関する最近の提言(留学生・国際化関連のみ抽出)

	教育再生会議 (検討状況)	経済財政諮問会議	総合科学技術会議	イノベーション25 中間とりまとめ(2月26日)	アジア・ゲートウェイ構想 中間論点整理(3月22日)
内容の多様化 充実、質の向上	・英語等の汎用的能力の確保、 ・優秀な留学生、研究者を惹き付けるインフラ整備(プロジェクトX)	成長力強化のための大学・大学院改革について/規制大国からの脱却と消費者主権の確立を(2月27日、2月16日) ・授業の一定割合を英語で行う	科学技術によるイノベーション創出に向けて(3月30日)等	・海外の優秀な人材を受け入れる環境(英語による授業の実施など)整備 ・大学院・学部の国際化の推進	・国際化の状況に関する全国調査の実施・公表 ・大学の国際化評価指標のあり方、大学や第三者機関による策定・活用、普及促進のあり方の検討 ・英語による体系的な教育プログラムの提供の促進
システムの高度化	・国際相互連携プログラムによる複数学位取得の推進(プロジェクトX)	＜国際的な相互連携プログラムの実現＞ ・海外、特にアジアの大学・大学院との単位互換の上限引き上げや2重学位制の奨励・支援	・優れた研究者、技術者などイノベーション創出や国際競争力を担う人材を確保するため大学、大学院、高等専門学校等における人材育成機能の強化	・研究と教育両面にわたる国際競争力強化	・国際的なダブルディグリープログラムの提供、国際的な大学間ネットワークへの参加等の促進
留学生関連制度	・単位互換システム導入や複数学位(ダブル・ディグリー)取得推進 ・留学生の大幅拡充プラン作成 ・日本への渡航前の入学決定など留学生来やすい体制へ ・英語による授業の拡大	・学生の相互交流のための奨学金の大幅拡充	・優れた学生に国籍に関係なくフェローシップを支給することを検討 ・海外の大学との連携プログラムを推進するなどしながら、博士課程在籍者の1割程度(年間2千人規模)を1年間留学させる	・大学生以上の交換留学の拡充 ・海外の優秀な人材を受け入れる環境(英語による授業の実施など)整備(再掲)	・世界の留学生市場の急拡大を踏まえた新たな政策目標の設定、受入における質と量両方の追求 ・渡日前から帰国後に至る体系的な支援体制の構築 ・キャリア・パスを見据えた産学連携の強化 ・日本人に対する留学支援策の充実(短期留学の促進、研究者の留学制度の充実等) ・国費留学生制度の改革
生涯学習、企業等との連携					・留学生のキャリア・パスを見据えた産学連携の強化(再掲)
大学入試の在り方	・9月入学の推進、ギャップイヤーの導入推進 ・内外に開かれた公正な大学院入学者選抜(プロジェクトX)	・大学の9月入学の推進	・大学院入試を内外無差別で英語で実施		
資金関連・その他		＜運営費交付金＞(教職員数等に応じた配分の見直し) ・国際化や教育実績等についての大学の努力と成果に応じた配分ルール・基準とする ・グローバル化、知識の融合化に対応した大学再編を視野に入れ、選択と集中を促す配分ルール・基準とする			・国際的なダブルディグリープログラムの提供、国際的な大学間ネットワークへの参加、英語による体系的な教育プログラムの提供等の促進

教育再生会議 <http://www.kantei.go.jp/singi/kyouiku/> より作成出展:財団法人アジア学生文化協会、「官邸主導で提案される新留学生政策の数々 その行方は!?」『ABK 留学生メールニュース』、2007年6月号、(<<http://www.abk.or.jp/asia/pdf/20070618.pdf>>)

**List of alliances and consortia**

		Conference of Asian University Presidents	The Cambridge-MIT Institute	Singapore-MIT Alliance(SMA)	BESETOHA	AGS(Alliance for Global Sustainability)	URA(University Research Association)	ASAHL(Association of Southeast Asian Institutions of Higher Learning)	ASEAN University Network (AUN)	AEARU (Association of East and Asian Research Universities) Ørsumdsuniversitetet:	COMPOSTELA Group of Universities	STANDER Group	EVROPAEVM	CLUSTER	CESAER	LERU (League of European Research Universities) Coimbra Group	IDEA League: (ETH, Imperial college, Aachen Tech, Delft Tech)	APRU (Association of Pacific Rim Universities) Universitas 21	AC21 (Academic Consortium 21)	IARU (International Alliance of Research Universities)	
Australia	Australian National University	○																			
Canada	McGill University																		○		
New Zealand	University of Auckland																		○		
UK	Imperial College London													○							
	University of Cambridge	○																			
	University of Oxford	○																			
USA	Harvard University						○														
	Massachusetts Institute of Technology					○															
	Yale University	○					○														
	Stanford University						○														
China	California Institute of Technology						○														
	Peking University	○																			
Denmark	Copenhagen University	○																			
France	Ecole Normale Supérieure, Paris																				
Germany	University of Heidelberg																				
India	Indian Institutes of Technology																				
Korea	Seoul National University																				
Netherlands	Eindhoven University of Technology													○							
Singapore	National University of Singapore	○																			
Switzerland	ETH Zurich	○																			
Japan	Hokkaido University																				
	Keio University																				
	Kyoto University																				
	Kyushu University																				
	Nagoya University																				
	Osaka University																				
	The University of Tokyo	○																			
	Tohoku University																				
Tokyo Institute of Technology																					
Waseda University																					

Source: Hiroshi Ota and Aya Watanabe, *The International Mobility of Researchers: Policy Support at National and Institutional Levels*, JSPS, 2007.